りびんぐらいぶず　令和2（2020）年５月第2号

正信偈　偈前の文

◆ご讃題

◆おほよそ誓願について真実の行信あり。また方便の行信あり。その真実の行の願は、諸仏称名の願(第十七願)なり。その真実の信の願は、至心信楽の願(第十八願)なり。これすなはち選択本願の行信なり。

その機はすなはち一切善悪大小凡愚なり。欲生はすなはち難思議往生なり。仏土はすなはち報仏・報土なり。これすなはち誓願不可思議一実真如海也。『大無量寿経』の宗致、他力真宗の正意なり。

（Ref『行文類』偈前序説　註釈版聖典 p202）

◆はじめに

宗〇記載の内容で分かり難いのは、

一つは、大行を南無阿弥陀佛とすること、今一つは、信因称報説で信楽次第で見ることです。前者は、「文によらず、義による」という空華学派の理解によります（Ref 梯　實圓『親鸞教学の特色と展開』法蔵館 p304）。

そこで改めて基本に立ち返ってみると、『正信念佛偈　偈前の文』では、行信次第であって(P202)信因称報説は、これに違背することになります。

◆お念仏は如来様から賜った如来様の行

◆親鸞聖人が法然聖人から教えられた本願の念仏は、「称名念佛」でした。

それは、「『南無阿弥陀佛』と称えよ」と云われた通りに、口に阿弥陀仏のみ名を称えつつ生きて行く。こういう相（すがた）を念仏といい、本願の行というからです。

念仏は確かに私が称えるのだけれども、それは私のはからいで称えるのではなく、阿弥陀如来が選び定めてお与え下さった南無阿弥陀佛と称える正定業であって如来様の救いの働きが私の口に顕れ出て下さっている相である。私が行じたとしても如来様の行を行じているのである。そのように親鸞聖人は見られたのです。

換言すれば、私が念仏を称えることは、お釈迦様が『大無量寿経』や『阿弥陀経』をお説きになっているのと同じ意味を持つ。念仏は凡夫が行うけれども、凡夫のはからいによる行いではない。如来様から賜った如来様の行を行じている。これが念仏だという風に聖人は仰ったのです。

◆念仏について、道元禅師は、「仏となるに、いとやすきみちあり」と云われた前に「ただわが身をも心をもはなち忘れて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて、

これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、こころをもついやさずして、生死をはなれ、ほとけとなる」(Ref 岩波文庫『正法眼蔵』「生死」p468)と云っておられます。

　言葉を聞いたら何か簡単なように聞こえますが、「そうしたら一体どうしたらよいのですか」と尋ねると、「仏様の仰る通りに生きたらいいのだよ」と仰る。

「仏様の仰る通りに生きるとはどうするのですか」と聞くと、「一滴の水も無駄にせず、朝から晩まで仏様の教えに従って.きちんとした見るからに仏様らしい生き方をしなさい」と仰る。「それができないので困っています」というと、「それはお前が弱いのだ」と仰る。道元禅師は厳しいのです。

◆親鸞聖人はそんな難しいことはおっしゃいません。しかし、お念仏はまさに「如来行」です「私が称えていても、私の行いではない。これは如来様が私の上に在ってはたらきたまう相である。だから一声一声、仏様の説法を聞くようにお念仏は聞くものですよ」と仰る。これが有名な「行文類」の六字釈に、南無阿弥陀佛とは、如来様が私を招き喚んで下さる声「本願招喚の勅命」ですよと仰った御言葉です。

「本願の念佛は私の行いではなく、如来様の行いが私の上に顕れている尊いはたらきです。だから念佛は大行であり、真実の行である」という風に仰ったのです。阿弥陀佛の本願を信じて、阿弥陀佛の仰せのままにお念仏を称えていけばいいのです。

◆和上があるとき聴講者から「なかなかお念仏が出ないのですが、どうしたものでしょうか」を云う質問されたことがある。「どうしたものでしょうか」と御相談戴いても私が代わりに称えてあげるわけにはいきません。「称えない自分が浅ましいと気付いたらすぐにお念仏をすることです。」これしかないのです。人間というのは、自分の心に任せていたら段々怠ける方に行くものです。「自分の心にまかせないで、仏様にまかせろ」と仰るのですから、仏様の仰せに任せて、その仰せの通りにお念仏しようと勤めていくことです。

◆そうすると「勤めたら自力になるではないか」と云いますが、そんなものは自力とは云いません。一生懸命念仏してこれが仏様のはからいだった」と気が付いたら、それを他力というのです。一生懸命念仏して「俺がやった」と自慢しているのを自力というのです。自力と他力を努力するか、しないかというところで見てはいけません。努力の質の問題なのです。

◆怠け者の自分が慎み深く努力し励んでいく。そして、こんなに励む私ではなかったのに、行じさせていただけるというのは有り難いなという風にいただけば、それを他力というのです。

◆聖人は、『正信偈』で「どうして私は本願を信じ念仏申す身になったか」ということを「依経段（えきょうだん）」と「依釈段（えしゃくだん）」の二段に分けて仰っています。初め

の「依経段」では、お釈迦様の教えである『大経』に依って、後半の「依釈段」では、そのお釈迦様の教えを、印度から中国、日本へと伝えて下さった七高僧のお勧めに依って、私は、「本願を信じ念仏を申す身にして戴きました」という風に仰っているのです。

◆「正信念佛偈」の偈前の文には、「おおよそ誓願について真実の行信あり」とあります。その「真実の行」は「諸仏称名の願(第十七願)によって恵まれ、「真実の信」は「至心信楽の願(第十八願)」によって与えられた。これが「選択本願の行信」である。「真実の行信」とは、本願を信じ念仏を申すことです。この選択本願の行信を親鸞聖人は「浄土真宗」と仰ったのです。親鸞聖人の仰った「浄土真宗」とは、もともと教団の名前ではなく、阿弥陀様の本願のはたらきに名付けた言葉でした。さらに具体的には私が今こうして本願を信じ念仏申していることを浄土真宗、即ち本願の行信を讃嘆する身になったと慶ばれたのが「正信念佛偈」だったのです。合掌。

(後書き)本書は、梯　實圓「正信偈」「季刊せいてん１０３号をもとにさせて戴きました。合掌。

◆仏教壮年会お聴聞の会六月7日(日)二十時より

◆仏教婦人会例会　六月十六日(火)十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派　正覚寺内)〒520-0501 大津市北小松四五二番地

TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職　堅田　玄宥